



このコーナーは、文書館に保存している古い写真を皆さんに紹介します。

※文書館では、まちの風景や催事などの古い写真を収集しています。原本はお返ししますので、情報の提供をお願いします。【文書館 ☎63・1010】



懐かしの1枚

津鳴神社

昭和8(1933)年以前 三野町

古くは浮世絵師の2代目安藤広重が『諸国名所百景』のなかで「讃岐久保谷のはま」として、津鳴神社を描いている。かつては牛馬と子どもの神様として信仰を集めていたが、農業が機械化しだした頃から子どもの神様として全国的に知られるようになった。津鳴橋が架けられたのは昭和8(1933)年のことである。

「想い出の1ページ」

「昔の津鳴神社は今みたいに橋が架かっていなくて、神社まで小舟で渡っていたんだよ」と話すのは、津鳴神社の総代の1人である齋藤満徳さん(74)。

「橋が架かった後も、昭和50年ごろまでは直接島に漁船を乗り付けて参拝する家族連れがよく見られました。愛媛県の川之江や三島、岡山県の下津井など県外からも来ていましたね。また、津鳴神社の景色は新さぬき百景に選ばれるほど、風光明媚なところで、参拝者以外にも潮干狩りや海水浴客でにぎわっていました。」

最初に架けられた橋の橋脚は石でできていたんですよ。自然災害の被害などもあり、今の橋は4代目でコンクリートのしっかりとした造りになっています。津鳴橋は年に2日間しか渡れないことで有名ですが、橋板を張るために地元の業者をお願いし、1週間前から約1,000枚の木の板を張って、参拝者を迎える準備をしています」

津鳴神社といえば、夏季例大祭初日の夜に打ち上げられる花火にも歴史があります。「昭和30年ごろには花火が打ち上げられていましたが、当時

は打ち上げ花火は珍しかったので、初日の夜は花火を見る人で大混雑でしたよ。子どもの数は減り、打ち上げ花火は珍しいものでもなくなりましたが、参拝者の数はほとんど変わっていません。今年も約3万人の参拝者が全国から集まってくれました。子どもの健康や成長を願う人たちが変わらずたくさんいることが、一番うれしいことですね」



編集 後記

子育てしながらどう働くか。話を伺った8人のママは、家庭や職場の事情に合わせて、自分はどうしたい!という意思も大事にして働き方を選んでいました。彼女たちが生き生きとしているのは、その選択に納得しているから。
「このまちで働く私が好き!そんなママが1人でも増えるように、思いを込めた特集です。」